

生活の底邊から思いをめぐらす

——杜甫夔州の瀼西草屋——

古川 末喜

1 はじめに

従来がない杜甫詩の新しさは、その形式や言葉づかい、思想や内容、テーマや題材など色々な面で指摘されている。そして長安から秦州、成都、夔州、最後は兩湖一帯へと、杜甫が居所を換えていくに従って、その詩も變容している。小論では杜甫晩期の夔州時代、とくに瀼西に移居してからの杜甫の詩を取り上げ、その中で、杜甫以前の詩人がなし得なかつたであろう杜甫獨特の詩表現を三點に絞って取り出し、なぜそのような表現が可能になったのかについて考察したものである。なお瀼西とはいえ、一時的に往來した東屯での作も一部含めることにする。

2 楚童に狎る

大曆二年（767）の三月、五十六歳の杜甫は、白帝城を離れ今の草堂河西岸の瀼西に移り住んだ^①。それ以後瀼西ではしばしば隱遁的雰圍氣の濃厚な詩を作っている。《1942「秋峽」の詩ではその前半で次のように言う。（ここでは仇注が鶴注によって東屯での作とするのには従わない。）

江濤萬古峽、 江濤の萬古にわたる峽
肺氣久衰翁。 肺氣の久しく衰えし翁

不寐防巴虎、 寐ねずして巴の虎を防ぎ
全生狎楚童。 生を全うして楚の童に狎る

杜甫は四十代から肺を病んでおり、「高秋に肺氣蘇（よみがえ）る」《1941「秋清」》とあるように、瀼西宅でも一進一退を繰り返していた。また三峽地帯は虎が多く「虎穴は里閭に連り、隄防するは舊より風俗なり」《1907「課伐木」》というように、實際に村里に頻繁に出没していたので、虎を防ぐことがこの地での重要事となっていた。虎は杜甫の夔州詩にしばしば出現する。詩の後半では、瀼西宅の門前には紅葉が落ちていた。それが掃かれていないのは人が訪れていない證據で、隱遁的住まいであることほのめかしている。

衣裳垂素髮、 衣裳には素き髮の垂れ
門巷落丹楓。 門巷には丹き楓の落つ
常怪商山老、 常に怪しむ商山の老の
兼存翊贊功。 兼ねて翊贊の功を存するを

とあり、最後は、八十餘歳の商山の隱士たちが山から出てきて、漢の高祖の太子を翼賛した四皓の故事を引き、自分にはそんな氣力も體力もなほほど弱っていると述べている。このようにこの詩は、瀼西宅で隱者の

ようなわび住まいをしつつ、病の身を養いながらなんとか日々の生活と格闘して生きているのだと述べている。

しかしわたしが注目したいのは前半の「全生狎楚童」の句である。小論ではその背景にある老荘の生活哲学と當時の杜甫の生活實態の二つの面から、この句の意味を考えてみたい。

「狎楚童」はあとで検討するように、柴刈りやたぎ拾いをする現地の童兒たちと近づき接するの意である。「全生」は自分の天性を保全するというよりは、生計を立て生活または生命を全うするの意味でより實際的である。この「全生」は、少しあとの《2003「小豎に課して舍北の果林を鋤斫せしめ、枝蔓の荒穢は淨め訖りて床を移す、三首」其二の詩で、

薄俗防人面、 薄き俗には人面を防ぎ
全身學馬蹄。 身を全うするには馬蹄を學ぶ

という「全身」と同じ意味であろう。馬蹄は莊子の馬蹄編を指す。馬蹄編の主旨は、人爲を加えることが萬物の生命をちぢめる原因だから、人爲を廢し無爲自然に生きてこそ生命を全うすることができるということである。だから杜甫はこの二句で、情の薄い當地の風俗にあつては人面獸心のごとき人々から身を守り、生命を全うするために人爲を廢して自然體で生きて行かなくてはならないと述べているのである。

このように瀘西の地で生きていくには、思想的には老荘の無爲自然の哲學をよりどころにせねばという思いが杜甫にはあるのだが、杜甫が學ぼうとする馬蹄編には次のようにある。

故に至徳の世は、…是の時に當たるや、…萬物は群生し、其の郷に

生活の底邊から思いをめぐらす

連屬す。禽獸は群を成し、草木は遂げ長ず。

故至徳之世、…當是時也、…萬物羣生、連屬其郷。禽獸成羣、草木遂長。

夫れ至徳の世は、同じく禽獸と居り、族まりて萬物と竝にす。悪くんぞ君子と小人をしらんや。

夫至徳之世、同與禽獸居、族與萬物竝、惡乎知君子小人哉。

無爲自然が實現された理想の世では、萬物は差別が無くなって一緒に住みあい、人間も君子や小人の區別がなくなる状態が現出するのである。

このほか「生を全うす」は、この年の春に《1850「暮春に瀘西の新賃の草堂に題す、五首」其二の詩でも、

養拙干戈際、 干戈の際に拙を養い
全生麋鹿羣。 麋鹿の群に生を全うす

のように用いていた。麋鹿のような禽獸と群居し生命を全うしながら生きていくというが、これも先の馬蹄編の思想に通じるものがある。もちろん麋鹿と群を同じくするという言い方は、隱遁や無位無官状態の代名詞のように用いられもするのだが。同じく瀘西で鶏と一緒に住んでいると詠じた《2005「向夕」の詩の、

鶴下雲汀近、 鶴の下るは雲汀はすまいに近く
雞棲草屋同。 鶏の棲むは草屋はわれと同じ

も同じように禽獸と群居する一つの形だと見なせる。ただ鶏とともに住むというのは珍しい表現で、自分を戲畫化したおかしみをどことなく漂

わせているのだが。

また「生を全うす」や「身を全うす」は、「命を全うす」という言い方とも同じであろう。《2065》「懐いを寫す、二首」其一の詩に、

全命甘留滞、命を全うして留まり滞ることに甘んじ
忘情任榮辱、情を忘れて榮と辱とに任せん

と詠じている。この二句目を書いたとき杜甫は『文選』にもある嵇康の「山巨源に與えて絶交するの書」の、

われは又、莊・老を讀み、重ねて其の放さを増せり。
故に榮進せんとする心を日びに頽れしめ、實に任せんとする情を轉
た篤くならしむ。

又讀莊老、重増其放。故使榮進之心日頽、任實之情轉篤。

『文選』卷四三「與山巨源絶交書」

を意識していたに違いない。老莊の無爲自然の境地にあれば、個人的な好悪や喜怒哀樂の情は忘却され、榮と辱の差別もなくなる。杜甫はこの詩でそうであろうとしている。

ここまで「全生」や「全身」や「全命」を手がかりに擧げた杜甫の詩句は、みな老莊的無爲自然の生き方を標榜している。というより、この時期、隱遁的な情調を詠じるとき杜甫の詩には、みなこの老莊の思想が基本にあるのだが、それは隱遁生活をおくる時、中國の士大夫がみな據り所とする思想で、特に取り立てて言うべきほどのことではないかもしれない。しかし「全生狎楚童」《1942》の句が、「全生麋鹿羣」《1850》や「全命甘留滞」《2065》と似た表現であることに着目し、さらに「全

身學馬蹄」《2003》を介在させることによって、それらに共通する杜甫の生活哲學を導き出すことができる。それは當地の童兒たちとなれ合い禽獸と群居する生活が、莊子の馬蹄編にいう生命を全うする生き方に、理論的にも合致しているということである。

さらに私が言いたいのは、杜甫の場合は生活の實際の必要性からも彼らとなれ合わなければならなかったし、現にそれほどの生活をしていてということである。以下、それについて述べたい。

冒頭の詩に戻って、「楚童に狎る」はわかりにくいが仇注の引く楊徳周の注に『楚童に狎る』は樵採を謂うなり」とあるのがヒントになる。樵採は柴刈り、たきぎ拾いの意で、だとすれば「楚童」は杜甫の詩語を借りれば楚の「樵童」のこととなる。樵童は「童」でなければ普通は「樵夫」であろう。「樵童」も「樵夫」もいずれも杜甫は使っている。夔州の地を杜甫は楚と呼ぶことがあるから、「楚童」は柴刈りを生業とする當地の少年たちを意味していることになる。當然ながら少年たちも、農事はもちろんそれ以外でもこうした生業に従事していた。唐詩には、樵童のほか、漁童、漁兒、牧童、牧豎などの言葉が見え、労働する様々な少年が點描されている。

柴刈り、薪拾いは、自家消費のためだけではなく、それを賣つて現金収入を得るためでもあった。そしてそれを賦税にも充てるのである。もちろんその生業は少年だけが受け持ったわけではない。夔州では男が戦争に驅り出されるため盛りを過ぎても嫁に行けない女性が多く、さらに當地の特異な風俗として、男が家にいて女が外で柴刈りの力仕事をしたリ、鹽井の危険な労働に従事しなければならなかった。杜甫はそんな夔州の婦人に同情を禁じ得ない。そのことを《1517》「薪を負うの行」で、

夔州の處女 髪は半ば華く、四十五にして夫家無し

更に喪亂に遭いて嫁には售れず、一生恨みを抱きて長く咨嗟なげく。
土風は男を坐せしめて女をして立たしめ、男は門戸に當たり女は出入す。

十のうち八九は薪を負いて歸る有り、薪を賣り錢を得て供給に應ず。
……

筋力もて危きに登り市門に集まり、死生のうちに利を射て鹽井を兼ね。

夔州處女髮半華、四五十無夫家。更遭喪亂嫁不售、一生抱恨長咨嗟。土風坐男使女立、男當門戸女出入。十有八九負薪歸、賣薪得錢應供給。……筋力登危集市門、死生射利兼鹽井。

のように詠じている。單なる薪拾いなら女兒にもできるが、柴刈りとなると斧を打ち下ろして枝を斷ち切る必要もあり、女なら成人でないと無理であろう。「筋力もて危きに登り」とあるように夔州のような山あいの地では、あるときには急な斜面に登り枝を引き寄せながら斧を使わなければならなかった。ただし次の《「十一」遣悶奉呈嚴公二十韻》の詩は成都時代のもので、やくぎな樵の少年が斧で切っているのは杜甫の草堂の大事な生け垣である。

藩籬生野徑、藩籬には野徑の生じ
斤斧任樵童。斤斧は樵童に任せん

また「市門に集まり」というように薪は町の市場まで擔いでいつて賣り、町の住民が買う。荊州に下つてゆく知人を見送つた杜甫の《「1833」王十六判官を送る》の詩では「(きみは)薪をかうに猶お白帝」などとある。このように當時夔州の地で、杜甫の身邊に柴刈りの仕事があり、薪

を賣るのがおり、そして薪をかうものがいたことを、杜甫の詩はよく傳えている。^③

杜甫が漢西に住んでいたとき、杜甫の家まで薪を擔いで賣りにくる樵童がいたであろう。杜甫が彼らから薪を買つていたことは十分に考えられる。「生を全うし楚童に狎なる」というのは、生活を全うしていくにはこうした樵童らと近づかなければならないことを言っている。しかも彼らの中には「牧豎と樵童は亦た無頼」《「85」從孫の崇簡に寄せる》というように、信用のおけないやくぎな連中もいた。もともと「楚童に狎る」の對になる句が「巴虎を防ぐ」で、虎と對置されているような存在ではあつた。この地でなんとか生活していくためには、やくぎな彼らと近づきなれ合うことも必要だと、杜甫は考えているのである。

杜甫がこの地で「狎れ」なければならなかつたのは樵童だけではない。漁樵や樵牧の言葉が熟するように(杜甫はいずれも使う)、樵のほか漁や牧を生業とする下層社會の人々とも身近に接して生きなければならなかつた。もちろん彼らは士人階層ではないし、律令制下で良民に分類される均田農民でもない。農民は土地に縛り付けられているが、彼らにはその土地さえない。士人階層からすると、土地に縛られない自由さを持つているように見えるが、彼らにも税の負擔はのしかかつていた。もちろん農民が樵や漁や牧を副業とすることはあつたろうが、ここで問題にしているのはあくまでそれらと區別して考えた場合である。夔州一帯には少なからぬ非漢族(獠)がいたが、^④漁樵の民の多くは獠人だつたに違いない。そのことは杜甫自身の次のような詩句から十分に考えられる。いずれも夔州の作である。

夷歌負樵客 夷歌するは樵を負うの客 《「1536」兩二首》其二
夷歌幾處起漁樵 夷歌は幾處か漁樵より起こる 《「1812」閣夜》

蠻歌犯星起

蠻歌はあかつきの星を犯して起る

《2049「夜二首」其一

この夷歌は蠻歌と同じで、現地の少数民族の獠族たちのうたう山歌（民歌）である。これらの詩句は彼らが漁樵の民であることを傳えている。

杜甫が普通に官にある人としての生活を送っていたら、そういう階層の人間または非漢族の民となれ合って生活する必要はなかった。しかし今この瀼西の地で杜甫はそういう生活を送らざるを得なかった。そして送る羽目になっていて自分を發見し、そんな境遇の變化に驚いている。悲嘆というよりは詠嘆である。だからそんな事實を、杜甫は何度も詩に描き込んでいる。同じ時期の《2006「天池」》の詩では、

九秋驚雁序、
九秋に雁の序に驚き

萬里狎漁翁、
この萬里のかなたに漁翁に狎る

のように、自分の姿を詠じている。これ以後杜甫には、自分の人生が今後もそうなっていくだろうとの豫感があり、夔州をいよいよ出發するときに、《2127「將に巫峽に別れんとし……瀼西の果園四十畝を贈る」》の詩で、

殘生逗江漢、
殘んの生は江漢に逗まらん
何處狎樵漁、
何れの處にか樵と漁に狎れん

と詠じ、また夔州を下った江陵でも《2158「秋日荆南にて、石首の薛明府が滿を辭して告別するを送り……三十韻」》の詩で自分の人生を、

十年嬰藥餌、
この十年は藥餌に嬰り
萬里狎樵漁、
みやこより萬里のはてにて樵漁に狎る

と詠じている。

樵漁に狎れるというのは、ほかにも樵童・漁翁・釣翁・釣童などの言い方を含めて、唐詩では時々使われている。ただこうした用例の三分の一は杜甫が占めているから、杜甫の特徴の一つだと考えられる。一、二、例を挙げれば、杜甫に身近な人としては友人の高適の「淇自り黄河を渉る途中の作、十三首」其十一の詩に、

臨水狎漁樵、
水に臨みては漁樵に狎れ
望山懷隱淪、
山を望みては隱淪を懷う（『高常侍集』卷二）

とあり、中唐の劉禹錫の「董評事の思歸の什を覽て困りて詩を以て贈る」の詩に、

幾年油幕佐征東、
幾年か油幕にて征東に佐たり
却泛滄浪狎釣童、
却つて滄浪に泛びて釣童に狎る

（『劉夢得文集』卷四）

などである。ただこれらの詩人は、隱遁的生活を比喩的に表現したものであったり、單なる願望を述べたり、因襲的な使い方をしているだけだが、杜甫には實際にそういう生活の實態があつた。他の詩人の隱逸詩や田園詩の系列のなかに置いても、杜甫の詩が「頭拔きん出ているのは、そうした底邊層の人々と接する生活を送り、その生活の實際に根ざした詩を作っていたからであろう。杜甫の詩が空虛に感じられないのはまさにそ

の點にこそある。

3 賦斂から歸る音を聞く

大曆二年の秋、《2049「夜二首」》の詩では、夕暮れから次の日の明け方まで浅い眠りのなかにあつて、あれこれ物音を聞きながら、遠く都より離れた地に落魄している自分の心境を歌っている。其の一では、

號山無定鹿、 山に號ぶは定まりし鹿は無し
落樹有驚蟬。 樹より落つるは驚く蟬の有り
……

蠻歌犯星起、 蠻の歌 星を犯して起こり
重覺在天邊。 重ねて覺ゆ天邊に在るを
(王洙本作「重覺」、仇本等作「空覺」。)

とあり、鹿の鳴く聲、蟬の落ちる音、當地の山歌などを聞いている。其の二では、

城郭悲筋暮、 城郭(白帝城)は悲筋のひびきのなかに暮れゆき
村墟過翼稀。 わが村墟には過ぎる翼も稀なり
甲兵年數久、 甲兵は年數久しく
賦斂夜深歸。 賦斂せられて夜深に歸る

とあり、農民が納税して夜遅く歸ってくるざわめきを聞いている。其の一では、この地の少数民族の山歌を聞いて、自分が天の最果てにいてお思い知らされているが、其の二では、農民たちの歸宅の物音を聞いてお

生活の底邊から思いをめぐらす

り、杜甫の住まいが農民たちと近接していることが分かる。《2023「又呈吳郎」》の詩によると、西隣には、はつきりした垣根もない状態で困窮した一人の婦人が住んでいた。

堂前撲棗任西鄰、 堂前に棗を撲つは西隣に任す
無食無兒一婦人。 食も無く兒も無き一婦人
……
便插疏籬却甚眞。 便ち疏籬を插さば却つて甚だ眞なり
(王洙本作「甚」、仇本作「任」。)

已訴徵求貧到骨、 …… 已に訴う 徵求せられて貧の骨に到るを、 ……
男の子の無い婦人で、徵税で骨まで搾り取られている等の表現から、この婦人が平民の寡婦(恐らく農婦)だとわかる。また《1939「秋日夔府詠懷……」》の詩には、

俗異鄰鮫室 俗は異りて鮫室を隣とす
とあつて漁民と隣同士に住んでいる。また同じ年の秋、《1920「甘林」》では、城内からミカン園のある瀼西へ歸り、瀼西宅で一夜を明かした。翌日、

明朝歩鄰里、 明朝 隣里に歩み
長老可以依。 長老は以て依るべし
……
相攜行豆田、 …… 相い攜えて豆田に行き、 ……

とあるように、同じ村の長老と手を攜え合って豆田の見回りに行っている。晩秋には瀼西から東屯に一時引越しているが、引越し先の東屯ではなおさらのこと、農民と隣り合って住んでいた。《2030》驛従り草堂に次し、復た東屯の茅屋に至る、二首》其二の詩に、

牧童斯在眼、
牧童は斯に眼に在り

田父實爲鄰、
田父は實に隣と爲る

とある。このように瀼西では、農民たちと住んでいる距離が極めて近い。これは成都草堂との違いでもある。

賦斂の句では、もしも杜甫が當地の地方官だったら彼の住まいは城内の役所の方にあつただろう。だから賦斂の作業が終わると、農民たちが歸り去る音しか聞こえなかつたはずである。しかしここは逆に、農民たちが杜甫の住まいの方に歸つて來ている。だから農民たちが家路に急ぐ音を杜甫は聞くことができてゐる。もちろん聞こえたからといって詩に取り上げるとは限らない。普通の詩人ならそうであろう。

「賦斂」は先秦の文獻から使われる見慣れた言葉である。にもかかわらず韻文にはいささか固い言葉である。今日現存する韻文で見ると、杜甫以前にそれを詩に用いた詩人はいない。全唐詩に十三例残るが、最初に用いたのは杜甫で、そのうち杜甫が四例を占める。あとは韋應物、白居易、李涉、薛能、李頻、杜荀鶴などだが、そんな語を使うのは、やはり社會派的要素を持つ詩人たちである。杜甫について言えば、下に列挙するようにみな夔州期の詩である。《1508》上白帝城二首》其一は、大曆元年、夔州に着いて間もないころの作、

兵戈猶擁蜀、
兵戈は猶お蜀を擁し

賦斂強輸秦、
賦斂して強いて秦に輸す

《1603》夔府書懷四十韻》(第四段)は、大曆元年秋の作、

恐乖均賦斂、
恐らくは乖かん 賦斂を均しくするに

不似問瘡痍、
たみの瘡痍を問うに似ず

萬里煩供給、
とおく萬里まで供給を煩わし

孤城最怨思、
この孤城は最も怨思す

《1920》甘林》は大曆二年秋、瀼西宅での作、

時危賦斂數、
時危くして賦斂數なり

脱粟爲爾揮、
脱粟は爾が爲に揮う

いずれも農民が賦斂によつて苦しんでいるという立場から使われている。およそ五十年後のことであるが、白居易は四十八歳のとき同じ三峽の忠州にいたことがある。杜甫も忠州には二年前の永泰元年に少しだけ滞在したことがある。ここでは冷たい仕打ちを受けたと見えて「主人の恩を覓むる莫かれ」《1448》題忠州龍興寺所居院壁》の詩句を残している。白居易の方は、そのとき州の長官で「秋税を徴し畢りて、郡の南亭に題す」《白居易箋校》卷十一)の詩を残している。州のトップに立つものとして最も重要な職務の一つである徴税の仕事をやり終えてほつとしてい

安可施政教、
安ぞ政教を施すべけんや

尚不通語言、
尚お語言通ぜず

且喜賦斂畢、且しほらく喜がらぶ 賦斂おわの畢わるを

幸聞閭井安。幸さいいに聞きく 閭井らの安やすらかなるを

豈伊循良化、豈あに伊いれわが良よ化かに循まわんや

頼此豐登年。此この豊ゆたかなる登みのりの年としに頼たるなり

白居易に言わせれば、治下の忠州は民衆は安らかであるという。ただこの認識はあくまで爲政者からのものであって、下にいる農民たちがどう感じていたかはわからない。だがそれは問わないことにして実際に民生は安定していたとしよう。そのことを白居易は豊年のためだと言うが、それは謙遜であり、善良な地方官であった白居易の手腕に負う所も大きかったであろうし、そのことをいくぶん自慢したげでもある。ただ白居易はこんな邊鄙なところに飛ばされて、言葉も通じない現地の人間をどのように感化すればよいのかと、ほとんどお手上げ状態でもある。

その點、杜甫は農民たちと隣合わせの状態に住んでいたから、前述したように生活のためには直接樵の少年たちと交渉を持たねばならず、二人の息子たちに至っては、現地の少数民族の言葉さえ話せるようになっていた（「兒童は蠻語を解す」《2002「秋野五首」其五》）。このような杜甫と白居易の違いは、思想の違いと言うよりは、生活の立場の違いによるものであろう。

杜甫は賦斂の制度をなくせとか、長官は農民から賦斂を取り立てはならないなどと言っているのではない。國家が農民に土地を與えて安堵し、農民は相應の租税を均等に負擔し、役人が管理を行うというのは、當時にあつては疑いようのない根本の原則である。ただその制度を安定的に機能させるためには國家は平和な環境を整えなければならず、官吏は横暴な重税で農民を搾り取ってはならない。事は非常に簡單なのである。

しかし國には戦争が絶えず、ために重税が農民にかけられ、さらに官吏

生活の底邊から思いをめぐらす

は私腹を肥やすためにいつその負擔を、取りやすい農民の方に押しつける。杜甫はそうした逸脱した狀況を農民側の低い目線から見ているのである。⁷⁾

《2049「夜二首」の詩にもどると、浅い眠りの中でいろいろな物音が聞こえ、役所から夜遅く歸っている農民たちの動きにも思いが及んでしまう。そしてわざわざそういうことを、自分の人生の悲哀と同一化して詩の中に書き込まざるを得ない。そこが杜甫の杜甫たる所以であるのだが、それを可能にしたのは、農民と隣り合わせた杜甫の住まい方だった。そしてそれこそが當時の士人階層の詩人がなしえなかったことの一つである。

4 きぬたのある風景

次の詩《2015「暝」》は、大曆二年の秋、瀼西草屋での作である。委細は省くがここでは仇注が東屯での作とするのには従わない。詩の前半は日暮れになって、牛羊、鳥雀それぞれがねぐらに歸る場面を置くことによつて、作者も我が家に歸ることを導き出している。

日下四山陰、日下りて四山は陰り

山庭風氣侵、山庭には風氣の侵す

牛羊歸徑險、牛羊は徑の險なるに歸り

鳥雀聚枝深、鳥雀は枝の深きに聚る

普通は家路に急ぐ狀況を言うために、『詩經』國風・王風の「日之夕矣、牛羊下來」を持ち出すのが詩の常套だが、杜甫の夔州詩の場合は、《2004「返照」》にも「牛羊は僮僕を識り、既に夕にして傳呼に應ず」とか、《2014「

日暮』でも「牛羊の下り來たること久しく、各己に柴門を閉ず」などと何度も描くので、案外實際の景色だったのかもしれない。後半は、部屋の中に視線が移る。

正枕當星劍、 枕を正さんとして星劍に當たり

收書動玉琴。 書を收めんとして玉琴を動かす

半扉開燭影、 半扉 燭影を開き

欲掩見清砧。 掩おほわんと欲して清砧セイシを見る

枕元を整えようとして劍に手が觸れ、書を片づけようとして琴に手がぶつかる。いかにも暗闇の中で起こりそうな日常の情景である。明の王嗣奭が「亦た常事なり、但だ人の道いいて及ばざるのみ」（曹樹銘『杜臆増校』卷九）というが、こんな描寫にも杜甫らしさが見えている。杜甫はこの詩で秋の日のつるべ落としのような突然の暗がりを、生活のディーテールの中で起こったとぼけた動作を取り上げることによって、面白がっているのである。ただ私がここで注目したいのは、清砧の句である。ある一段の時間が過ぎ去ったあと、扉が半開きになっていて、ともしびの光が漏れている。そこを閉めようと起き出して、砧きぬたが置いてあるのが目に入ったと詠じる。この句の尋常ならざる所は、王嗣奭が「清砧は聞くと曰わずに、見ると曰うは亦た妙なり」（同上）というように、砧を打つ音を聞かずに見ている所である。

男が田を耕し女が布を織るのが傳統中國での農民の務めであったから、布や衣を石の臺砧にのせ木槌で打って柔らかくする砧打ちの作業は、もっぱら女性の仕事であった。それは、決して軽いとは言えない木槌で、何時間も打ち続けなければならない辛い労働であった。しかしその作業は中國古典詩の中では、男性詩人によって詩情を誘うかっこうの詩材と

して取り上げられることとなる。女性の行爲を男性が歌う、ここに一種のねじれ現象が起こり、事の本質が隠れ一面的な描かれ方のみが通行するようになる。中國古典詩では作者は九分がた讀書人階層の男性であるから、こういう奇形の現象は致し方のないことである。砧打ちの労働は、どうしても外から見た風物のように描かれてしまい、男性詩人は労働婦人の内面に密着できない。

女性からすれば辛い労働であるが、詩人からすれば聴くものである。だから古來「聽砧」「聞砧」「聽擣衣」などの詩題が多く作られた。しかも讀書人階層の詩人からすれば、砧打ちの作業は自分たちの生活圏の外にあるもので、一つ下の階層に屬するものである。富裕な育ちの詩人のなかには砧打ちの現場を見たこともなければ、實物の砧に觸ったこともない者もいたかもしれない。砧の音を聞くのは夜である。だから「暮砧」「夜砧」などの詩語がある。それは晝間は聞こえても、詩人たちの耳に入らないというよりは、機織りが女に課せられた仕事だとはいえ、晝間は夫とともに野良に出なければならず、ほとんどが女の夜なべの仕事だったからである。傳統的な詩語としての「砧」は、冬の迫り來る秋の夜長に、婦人が、旅の途上、あるいは邊塞の戦にある夫の冬衣の準備をするというイメージに固定されている。砧を詠じた詩は多いが、その中で典型的な李白の「子夜呉歌」其三を擧げてみよう。

長安 一片の月、萬戸 衣を擣うつの聲

秋風吹きて盡すべぎず、總すべて是れ玉關の情

何れの日か胡虜を平ららげ、良人 遠征を罷やめん

（『分類補注李太白詩』卷六）

ここには、定型化された砧打ちのイメージが一流の詩人によって美しく

凝縮されている。

杜甫には砧にまつわる詩が七首あるが、四十八歳になる杜甫が秦州で作った《OT35「衣を搗つ」》の詩は、こうした従來の砧のイメージから明らかに抜け出すことができています。

亦知戍不返、 亦た知る 戍りて返らざるを

秋至拭清砧、 秋の至りて清砧を拭う

已近苦寒月、 己に苦寒の月に近し

況經長別心、 況や長別の心を經たるをや

寧辭擣衣倦、 寧くんぞ辭せんや衣を擣ちて倦るるを

一寄塞垣深、 一に寄す塞垣の深きところに

用盡閨中力、 用い盡くす 閨中の力

君聽空外音、 君よ聽きたまえ わがこの空外の音を

國境守備に驅り出されて今年の冬も歸還できない夫、そんな夫を戀しく思いながらひたすら砧を打って夫の冬着を準備している妻。この詩は、そんな女性に成り變わって男性詩人が歌うという傳統的な閨情詩の枠内にある。そして砧も音を聞くものという傳統的なイメージを下敷きにしている。しかし二句目の清砧の取り上げ方は、拭うという動作が描かれており、より女性の立場に立って具體的である。五句目・七句目には、砧打ちが疲勞をとまなう行爲で、細腕の女の力を使い果たすと詠じているが、杜甫は、重い勞働という砧打ちの本質をしっかりと見据えている。さらに杜甫は砧の音を聞いている時、なぜかくも多くの女性が孤閨を守らなければならぬのか、その政治的社會的背景まで理解していたはずである。

再び《2015「暝」》の詩に戻ろう。末句の「清砧を見る」は、南宋の趙

生活の底邊から思いをめぐらす

次公が「末句の、扉、掩わんと欲して清砧を見るとは、則ち更に其の半扉を掩わんと欲する時に、己の家の清砧を見るなり」（『杜詩趙次公先後解輯校』戊帙卷八）と言い、明末の王嗣奭が「此の砧は蓋し家に在る者なり」（同上）というように、杜甫の住まいの中にあつた砧である。杜甫のこの句が、従來の表現から一頭抜き出ているのは、清砧を聞いているのではなく見ていること、しかもその清砧が杜甫の生活の身邊にあつてそれを取り上げていることである。

なぜ杜甫に至つて、従來ほとんど聽くものとしてしかイメージされなかつた砧が、このような新しい表現の中で用いられるようになったのか。恐らく普通の讀書人層の生活圏内には、砧という女性勞働の工具はそれほど身近には存在しなかつたであろう。ところが杜甫の場合、そういう謂わば野暮つた道具が瀼西草屋の生活の身邊にあつたのである。それほど生活の生活を夔州では送つていたのである。そのことが、身邊にある生産道具を詩の中に持ち込ませるようになった根本での原因であろう。杜甫の目は、砧という事物に對する固定觀念から解放されている。瀼西での生活のあり方が杜甫の詩を變えたのである。そういうふうに見てくると、夔州期の杜甫がしばしば砧の聲を耳にして、

「天は清くして小城に練を搗つこと急なり」

《1721「秋風二首」其二

「白帝の城は高くして暮れの砧は急なり」

《1723「秋興八首」其一

「砧の響きは家家より發し、樵の聲は箇箇に同じ」

《2002「秋野五首」其四

と詠じていたとき、當地の女に課せられた賦税の性急さ、勞働の辛さに

も、杜甫は思いを寄せていたに違いないのである。

4 おわりに

以上、楚童に狎れる、賦斂から歸る音を聞く、砧を見るという三つの言い方に絞って、それが従来にはない杜甫独自の新しい表現であること、を指摘した。事實にもとづいてそれをそのまま描寫しながら、それがいままでも誰も意識に上せなかつた事柄の描寫となり、結果としてそれが杜甫の詩の新しい一つとなつていた。

杜甫がそのような新しい表現をなし得た理由には、一般的に言えばなによりも詩人としての資質、家柄や育ちや經歷、そして思想・詩學上の影響などが関わつていよう。しかしここではその理由の一つとして、瀼西における底邊層の人々との接近した生活、住まいのあり方がその根底にあつたからではないかと考えてみた。そしてそういう杜甫の生活、住まいかたは大曆初めの當時にあつては、従來の士階層の詩人では未だあり得なかつた。

存在が意識を決定する、使い古された言葉だがその言い方を援用すれば、ここでも杜甫の生活のあり方がその詩表現を変えたといえるのではないか。

注

杜甫のテキストと編年は基本的に清・仇兆鰲注『杜詩詳註』全五册（中華書局、一九七九年）に據り、適宜宋本系テキストを参照した。仇注に従わないときに限って注記する。引用した詩題の前の四桁の數字は、前二桁がその仇注本での卷數、後二桁がその卷數での順番を表す。なお杜甫は十ヶ月も住まなかつた瀼西（東屯）の住まいを草屋、草亭、草堂、茅棟、茅齋、茅屋、茅宇、誅茅、白屋、編蓬、古堂、高齋、（南軒、曾軒）

などと呼んでいる。ここでは瀼西宅や瀼西草屋の言い方を用いる。

- ① 杜甫の瀼西宅が、通説のように梅溪河（西瀼水）の西岸でないことは、「杜甫の詩に描かれた瀼西宅の位置について——白帝城東、草堂河西——」『中唐文學會報』好文出版（東京）、第十三號、二〇〇六年十月、を参照。
- ② 加藤國安氏は成都期の《0930》「江村」に「相親相近水中鷗。」について「ここに人と禽獸が境界を無みして『相狎れ相近づく』という、あの神話的樂園の現象が瞬間的に生ずるのだ、と考えられる。」と説いておられる。「杜甫の『物我合一』の意境とその詩表現——成都期の『江村』詩を中心に」（『愛媛大學教育學部紀要・第II部／人文・社會科學』第二五卷第一號、一九九二年九月、一〇二—一〇三頁）
- ③ 『太平廣記』の中から、唐人にしばつてそうした生業をなす者をさがしてみると、「唐豫章民有熊慎者、其父以販魚爲業。……後鬻薪于石頭、窮苦至甚。」（第一一八卷）、「唐天祐初、有李甲、本常山人。逢歲饑饉、徙家邢臺西南山谷中、樵採鬻薪、以給朝夕。」（第一五八卷）、「侯元者、……山村之樵夫也。……唯以鬻薪爲事。唐乾符己亥歲、於縣西北山中伐薪、……」（第二八七卷）などがある。
- ④ 川本芳昭氏『中國六朝期における人の移動、及びそれにとまなう内外の政治的社會的變容について』（課題番號09610367、平成九年度〜平成十一年度科學研究費補助金・基盤研究（C）（B）研究報告書、二〇〇〇年三月）。鮮于焯氏「三峽少數民族『僚人』和杜甫詩歌創作之波瀾」『民族文學研究』一九九八年、第三期、七八〜八四頁（『復印報刊資料／中國古代、近代文學研究』一九九八年第一期所收、一七七〜一八三頁所收）。譚繼和氏「杜甫夔州詩中的巴蜀民族問題」『巴蜀文化辨思集』二二五〜二四九頁所收、四川人民出版社、二〇〇四年六月（原載は『草堂』一九八四年第二期）。
- ⑤ 杜甫の詩語「漁翁」の特徴については、安藤信廣氏の「漁翁・漁父」（『詩語のイメージ／唐詩を読むために』松本肇・後藤秋正編、東方書店、二〇〇〇年、三〇三〜三三三頁）に考察がある。
- ⑥ 『0641』閔鄉姜七少府設繪戲贈長歌「襄人受魚鮫人手」では、杜甫は

鮫人を漁夫の意で用いる。よつてここでは鮫室を漁夫の家と解した。なお「俗異鄰鮫室」とするのは仇注本だけで、宋本系はみな「兒去看魚笥」に作る。仇注は王洙本系に「一云『俗異隣鮫室』」とあるのを取つたのであろう。その理由は、この段は本來居室を言うのだから、そこに魚を捕らえる笥かごを入れるべきでないし、この句は左思の呉都賦の、鮫人が泉室うすきむらで綃うすきを織るといふ言い方を踏まえているという（『文選』卷五「泉室潛織而卷綃」）。ここでは仇注に據るが、宋本系が正しかったにせよ本稿の主旨には差し支えない。

⑦ 大曆元年冬、柏茂琳が夔州刺史として着任した。杜甫は柏茂琳に替わ

つて感謝の表を天子に奉つたが、そこでも同じような考えを《2502》爲夔府柏都督謝上表》で「伏揚陛下之聖德、愛惜陛下之百姓、先之以簡易、間之以樂業、均之以賦斂、終之以敦勸、然後畢禁將士之暴、弘治主客之宜、示以刑典難犯之科、寬以困窮計無所出、哀今之人、庶古之道。內救俾獨、外攘師寇。」と述べている。なお、賦役を公平にせよという主張自體は政府公認のもので、少なからぬ人が主張し、「均賦」は熟語にさえなっている。

（佐賀大學教授）